師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18845993

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, 無理矢理, モ腐サイコ小説50users入り

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の５話目です。今回は軽い無理矢理描写があります。本番はエク霊、モブ霊となります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ワンナイト・ホラー　5

〜昨日、Sideエクボ〜

まぁた性懲りも無くワンナイトしようとしやがって。
ガラの悪い男を催眠で眠らせて、霊幻の隣に座る。
「あれ、お兄さん、耳欠けてたんだな」
酒でふわふわしてる霊幻がふにゃっと笑う。
はー。
可愛い。
ほんともう惚れた欲目で傾世の美姫か何かに見える。
まぁコイツ、やろうと思えばシゲオや俺なんかを使役（つか）って世界を傾けられるんだけどな。それをしないだろうところがまた好ましい。
こんなこの世の至宝みたいなやつを、そのへんの有象無象がベタベタと汚してきたのかと思うと、虫酸が走る。
「さ、行こうぜ」
するりと腕を組んでくる霊幻に顔が弛むのが抑えられない。
コイツ俺様のなんだぜ、って自慢しながら歩きたい。何百年かぶりの恋に、俺様は魂が燃え上がるような情念を感じていた。
ホテルでの情事を期待して色気を振りまく霊幻をうっとり眺める。

霊幻、
死んでも離さねぇよ。

「……そんなに見つめられると、照れる」
頬を染める霊幻に思わず天を仰ぐ。
「ぐぅっ、可愛すぎる……」
「はぁ！？……お兄さん変わってんな」
満更でもなさそうな霊幻にニヤニヤが止まらない。
おまえ褒められるのホントは大好きだもんな？
自己肯定感が地を這ってる奴ってのはチョロいよなぁ。ちょっと認

められたり褒められたりしたらガタっと感情が動いちまう。
チョロいお前も大好きだよ、霊幻。
経験値の高い俺から見りゃあ精神的に病んでるっぽいコイツの行動なんて予測の範囲から出やしねぇ。
何が原因だか知らねぇが、霊幻にはかなり大きなトラウマがある。
昼間、相談所で芹沢や客に囲まれてる間は平気みてぇだが、どうも夜になると余計な事を考えて苦しくなってるっぽい。まあ夜がキツいのはウツあるあるだろうけど。
酒が飲めない霊幻はセックスに逃げた、んで中毒になった、んだろうな。
まったく、世話が焼けるったらねぇな。
しっかりしてくれよ、所長。俺たちの大将だろ、お前。
お前が稀有な得難い聖者なのは、とっくの昔にバレてんだよ。美味そうな魂しやがって。
詐欺師のフリしたペ天使め。
「このラブホでいいか？」
指差すお前に、天国に連れて行ってもらおうか。
今日はシゲオと芹沢が外で待機だ。

「んんっ」
ラブホの部屋に入ったら我慢できなかった。薄い霊幻の唇を奪う。
激しく舌を追う俺に、バランスを崩して霊幻が転倒しそうになるのを、抱きしめて支える。
うっとりと俺様を見つめる霊幻にくらくらする。
あー。
好きだ。
ごり、と霊幻が誘うように勃ち上がった自身を擦り付けてくる。
ガン勃ちじゃねえか。くっそエロいな。
「ん……ふ、んぅっ……」
舌で貪りながら太ももでごりごり擦ってやれば、可愛らしい吐息が漏れた。
キスだけじゃじれったい、と言いたげに腰を擦り付けてくる霊幻に、仕方なく口を離す。

「霊幻……」
あ、いけね。
想いが溢れて、思わず俺様しか知らない情報を漏らしてしまった。
目を見開いた霊幻がじっと確かめるように俺様を見つめる。
『愛してる』
呪いの力を借りながら、催眠を少し深くかける。
能力者にしか聞こえないシャラシャラとした音を立てながら、文字が霊幻の肌を這う。
「お兄さん、何て呼ばれたい？」
文字がふわりと消える頃には、霊幻はふにゃふにゃと笑う酔っ払いに戻った。
「エクボ」
「エクボかぁ。あだ名？」
「本名だよ」
「またまたぁ……」
情けねぇ。抑えがきかない。霊幻の身体をまさぐりながら、はぐようにに服を奪ってしまう。くそっ、童貞かよ……！
「ボタン飛ばすなよぉ」
くすくす笑いながら俺の背中を撫でてくる霊幻に愛しさがつのる。
「れーげん、れーげん……ずっとこうしたかった」
あらわになった素肌を辿るように抱きしめる。
すべすべの肌がめちゃくちゃ気持ちいい。
「酔ってんの？」
霊幻が抱きしめ返してくる。ぎゅっと胸が締め付けられて、愛しさが募って、募って、どうにかなりそうだ。
「体温がきもちいーなぁ」
あたたかい。
霊幻の生身が、この腕の中にある。
そっ、と頸動脈に口付けた。
「すごくドキドキしてる。期待してんの？」
微笑みながら、俺の頬を撫でてくる霊幻に喉が鳴る。
「期待してくれていーよ。俺、具合がいいってみんな言ってくれるから」

うわ。
まじかよコイツ。
「な、なんだよ……」
いや、面と向かって浮気を自慢されて面白いはずがねぇだろうが
よ。
「……萎えること言うなよ。ごめんな、俺様、ビッチアピール駄目
なんだわ」
ああそうか、俺様だとは分からないんだっけ。じゃあ仕方ねぇな。
にっと笑ってみせると、霊幻がほっとした顔になる。
「分かった。楽しもうぜ」
ちゅ、と可愛らしく鼻先にキスしてきて、
「〰〰〰〰〰〰〰！？」
たまらなくなってぎゅっと抱きしめる。
「ハグ好きだなぁ」
くふくふと情にまみれた声で霊幻が笑う。
「体温が好きでな」
抱きしめたままほとんど裸の霊幻の身体をまさぐる。どこもかしこ
もいい手触りだ。
「あ……んっ、ぁあ……っ」
感度がいいな。手を滑らせるとぴくぴく震えるのが可愛い。
「霊幻……愛してる」
だからこそ。
ちょっと痛い目に遭ってもらうぜ。
ワンナイトの怖さ、ってのを思い知ってもらわないとな……？
シャカン、と霊幻の手に手錠をかけて、ベッドに突き飛ばした。
「え」
ヘッドボードの支柱に手錠を繋ぐ。
「え……何すんだよ」
きょとんとこっちを見る霊幻の目の前で。
ぱきん、と割り箸を半分に折って見せた。
催眠が深い霊幻にはナイフに見えているはずだ。
が、霊幻はつまらなそうにその擬似ナイフを見て、ふいと天井の方
を向いた。

す、と目を閉じる霊幻。
な、なんだ、こいつ。
「……何考えてやがる」
思わずうめきを漏らすと、トロリとした目を霊幻はうっすらと開けて見せた。
「優しくしてね♡」
！？！？！？！？
プレイの一環だと思ってんのか！？催眠が効いてねぇのか？
「てめぇ、どういう状況か分かってんのか」
念のため確認する。無抵抗な霊幻が心配になってくる。
「ヤるんだろ？痛くしないでくれよ♡」
……どんだけ危機感に欠けてんだよ、そんな馬鹿だったかお前？
「っんあ♡」
割り箸の擬似ナイフを太ももにひたりとつけてやると、びくりと身体が緊張する。ナイフには見えてやがるな？でもそれでも勃起してる、ってどんな脳内してんだよ。
「お前、死ぬのが怖くねぇのか？」
前からその疑いはあったが、いよいよ現実味を帯びてきやがった。
「なぁ早くヤろうぜ……準備ならもうしてるからさぁ」
甘ったるい声を出す霊幻に舌打ちする。俺たちが何よりも大事にしてるお前をぞんざいに扱うお前自身が許せない。
「聴け、色狂い。このまま殺されてもいいのかってきいてんだよ俺ぁ」
ふ、と綺麗に霊幻は微笑って。
「財産はもう処分してある。家具も大したものは残ってないし、仕事の引き継ぎも部下に済ませてある。恋人も居ないし、毎晩遺書をテーブルに置いてから男漁りしてんだよ」
ぞく、っとした。悪霊をビビらせるなんて大したもんだぜお前。
「俺が死んでも『安全』なようにしておかないとな」
歌うように言う霊幻がおそろしい。やめてくれよ。そんな悲しいこと言うな。ってかお前重度のウツだろ。病院行け病院。
「こんな出来損ないの身体をヤって気持ち良くなってくれんなら、頼むわ」

「出来損ない、って」
「無精子症なんだよ、俺」
泣き出した霊幻に衝撃を受ける。
あ〜〜〜〜〜〜〜、それでかーーーーー！！
そりゃあ生きてる人間にはキッツいわな。
「たったそれだけでよぉ、俺は自分のガキを諦めなくちゃならなくなったし、好きな人と結婚することもできなくなった」
ようやく泣けた霊幻の話を黙って聴く。少しはスッキリするといいな。
「死にたいか？って訊かれると死にたくねぇけどよ、生きてるのが辛いんだよ。他人都合で殺されるなら、そんな楽なことはねぇかな」
涙でキラキラ光る瞳が、胡乱に俺様を見つめる。
「早くヤって、イかせてくれよ♡」
俺様はおお〜〜きなため息をついて。
念のため左手も手錠で拘束する。
「れーげん……どうして辛いって言ってくれなかったんだよ、お前」
俺たち、そんなに頼りなかったか？
シャカン、と右足首にも足輪を嵌める。
「いや……言えないか、デリケートな話だもんな」
性的な話は相談しづらい。明け透けに言えってのも無茶だ。
「でもこれは悪手だぜ。良く考えろよ、大馬鹿野郎。お前がワンナイトで殺されでもしたら、モブや芹沢はどんな狂い方するか分からねぇぞ？俺様だってそうだ。というか──」
割り箸を振りかぶりながら、念のためもう一度催眠をかける。
「死ねると思ってんのか、お前」
割り箸を霊幻の心臓に向かって振り下ろした。
「あっ♡」
うっとりと凶刃を受け入れた霊幻が射精する。
「くそエロいな」
思わず口からこぼれた。
「……え」

霊幻の顔色が悪くなっていく。ナイフで死ねない幻覚と、幻痛が霊幻を襲っているはずだ。
「お前がワンナイトやってるって分かった時点で、『そういう何か』はモブか芹沢にされてるって思った方が良かったなぁ？」
痛みに霊幻の顔が歪む。
「あ……」
かたかたと震え出した身体に。
「ようやくいい顔になったなぁ？」
俺様は満足げに微笑み、ぐりっ、と割り箸で霊幻の太ももを押した。
「ぎゃあああああああっ！！いやだ、やめてくれ」
やめるかよ、こんな楽しいこと。
「さてと、俺様も愉しませて貰うとするかな」
いい加減限界だ。コンドームをつけて挿入させてもらった。
「……っ、」
ヤバい。きゅうきゅう締め付けてくる霊幻に持っていかれそうになる。
じん、と腰が痺れて、甘イキした。
「〜〜〜っ、刺すならチンポだけにしろよ！！」
何言ってんだコイツ。
「あんっ♡イくっ♡」
腰を打ち付けると喘ぎ出した。何だコイツ。イカれっぷりもここまでいくと怖い。
いや、本当に状況分かってるか？
俺様お前に痛い目に遭って欲しいんだけど。
割り箸を脇腹に押し付ける。
「イっ……ぎゃあああああああ！！イぎぞうだったのにっ！！ばかっ！！」
「何でこの状況でイけるんだよお前。マジ頭のネジぶっ飛んでんな……っう」
痛みで締まった内部に搾り取られる。不覚にも出しちまった。
「ずるいっ！！」
「言うにかいてそれかよ……」

あきれた……。
「もっかい♡はやくズボズボしてえっ♡」
コンドームを付け替える俺を、霊幻が腰を揺らして誘う。
「正気かお前」
「チンポ勃たせながら言っても、間抜けなだけだからなっ♡♡」
ま、それはその通りだ。
「ほらよ、お望みのモンだ」
「んっ♡」
ズブ、と亀頭を肉筒にくぐらせながら。
「おらよ」
割り箸で腕を押した。
「ああああああああっ♡」
……こいつ、刺されてイキやがった……！
マジかよ、
マジかよ……。
「お前さんを形容する言葉がビッチじゃ足りなくて俺様、困ってる」
ここまでいくとある意味凄い。さすが俺様の惚れた男、ネジのぶっ飛び方が違ったわ。
「いいからっ♡早く犯してぇっ♡♡」
へぇへぇ、と。激しく腰を振るとガチャガチャ手錠が鳴る。身悶えた霊幻が身体を捩っているのだ。
「あんっ♡ああっ♡エクボぉっ♡ゴリゴリ、ゴリゴリしてぇっ♡♡」
快感に幼くなった顔でねだる霊幻にきゅうと心の奥が甘く引き攣れる。
「霊幻」
激しく腰を振ると、甘えたような嬌声を上げる霊幻の頭を、思わず撫でてしまう。
「〜〜〜〜〜〜〜っ♡♡♡」
涙を流しながらイった霊幻に、釣られるように俺様も出す。
精液を擦り付けるように奥を押し続けると、また霊幻がイって、ことん、と意識を飛ばした。
眠る霊幻の頬を撫でると、ぱく、と指を食まれてゾクゾクする。

大丈夫だぞ、霊幻。
俺様がいる。
もう１人で悩まなくていい。
そう思いながら抱き締める。

ナイフで分からせるのは失敗した。
仕方ねえ、普通に脅すか。

※※※※※

〜Side霊幻新隆〜

「れーげんさん」
明るい顔をしたみーくんが手をひらひらと上げたので、ファミレスの店員にその席に案内してもらう。
「ドリンクバー１つ」
みーくんの向かいに座りながら注文する。
「霊幻さん、かあちゃん病院に入院させてくれたんだって？」
きらきらした目で言うみーくんに後ろめたさを覚える。
「あくまでみーくんのためにしたことだ。お母さんの希望を通した訳じゃない。それは忘れないでくれ」
誰でも彼でも救える訳じゃない。
「そのうち俺もみーくんもお母さんに恨まれる時が来る。……ごめんな、それでも俺はみーくんに幸せになって欲しい」
みーくんは長いまつ毛を伏せて、ず、とジュースをすする。
「ホントにお人好しだよね、霊幻さん。ちょっと心配になってくる」
ふ、と暗い瞳をしてみーくんが笑う。
「あのアル中メンヘラ女がどうしようもねぇクズだなんて俺ぁとっくの昔に分かってたさ」
人を刺すような目をして乱暴な口調で言われてビックリする。みーくんのそんな姿を初めてみた。

「……なんてね」
いつもの人懐っこいみーくんに戻る。
「あーやめやめ。俺、霊幻さんの前じゃ可愛いみーくんでいたいんだよね。ね、霊幻さん」
す、とみーくんにテーブルに置いていた手を握られる。
「……今夜どう？」
かあああっと顔が赤くなる。
「みーくん、俺はもう君から性的搾取をしたくない」
断らないと。今、俺はワンナイトできない。
「霊幻さん、俺、お礼したいんだよ。ねぇ、サービスするからさぁ。スッキリさせたげるよ？」
するするとみーくんが指を絡めてきて煽られる。
ヤりたい。
むくむくと沸いてくる気持ちに必死に逆らう。
「ダメだっ……俺、ワンナイトは、もうっ……」
いつのまにか横に移動してきていたみーくんが俺の腰をすりすりと手で撫ぜる。
「霊幻さんビッチやめたんだ？ふーん、そっか……ワンナイトじゃなければいいんでしょ？」
ふっ、と耳に息を吹きかけられてビクっと跳ねる。
「今日だけ俺を霊幻さんの彼氏にしてよ。明日の朝には別れればいい。これならワンナイトにならないでしょ？」
「あっ」
ぐっと性器を握られて出そうになった声を慌てて手で塞ぐ。
「もちろんそのまま付き合ってもいーよ。そしたら毎晩タダで抱いてあげるよ？ね、霊幻さん……恩返しさせてよ」
ワンナイトじゃないなら……
いいのかな……
「おれ、こんなに弱かったかな……」
「売れっ子男娼の俺にここまで抵抗できたんだから、むしろ強い子だって」
悪戯っ子のように笑うみーくんがぐりっと俺の性器をこねる。
「ぅあっ♡」

反射的に跳ねた手が当たって、がしゃ、とみーくんのジュースをこぼしてしまった。
「あらら。俺、拭くものと霊幻さんの分もおかわり持ってくるわ」
気の利くみーくんが、すっかり勃ってしまって動けない俺の代わりに立ち上がる。
「──お待たせしました」
ことと、と目の前に置かれたアイスコーヒーを一口飲む。
あれ……？
なんかおかしくないか、これ……？
「どうかしましたか、師匠？」
みーくんが俺の汗で張り付いた前髪をそっとよけてくれる。
「ホントに俺の彼氏になってくれるのか……？」
ものすごい憤怒がモブの身体中から漏れ出す。
「えっ？」
戸惑う俺に、いつもの感情の余り乗らない笑みでみーくんが見つめてくる。
「もちろんですよ。『愛しています』、霊幻師匠」
「……じゃあ、ホテル行こ」
情け無い。みーくんの提案に甘えてしまった。俺はもう、こうなったらヤりたくて仕方なかった。

※

「あっ」
ラブホに入ったらすぐ押し倒されて戸惑う。
「性急だぞ、みーくん。準備してないから、ちょっと待って」
洗浄道具を持ってきてしまうのが、もう、俺の弱さだよなぁ。
「……もう抱きたいのに」
我慢できない、と言いたげなみーくんに戸惑う。
「すぐ準備してくるから待ってろ」
「……何か手伝う事ありますか？」
「はぁ！？あるわけないだろ」
慣れた手順でトイレで洗浄と拡張を済ませる。

「う、わっ」
トイレから出たらみーくんが待ち構えていてビックリした。
「もういいですか？」
「もういいけど……うわっ」
またベッドに強引に押し倒された。
「ちょっ、スーツ脱がせてくれよ。シワになっちゃうだろ」
みーくんの目が据わっている。
「あっ♡」
のしかかってきたみーくんが手でシャツの上から身体をまさぐってくる。
「な、なんか今日は、ガッついて……んっ」
覆いかぶさったみーくんがつたないキスをしながら、超能力で一気にシャツのボタンを外す。

……ん？

「んっ♡んんっ、むーっ、ん、んぅっ♡」
乳首を捏ねられて身体が跳ねる。
また超能力でベルトが抜かれてズボンを奪われる。
下着まで脱がされそうになって。
「ちょ、ちょっと待て」
「はい、『好きですよ』師匠」
あれ……
なんだっけ……
ぼーっとみーくんが俺の下着を脱がせるのを眺めている。
「わ、もうトロトロだ」
みーくんが指を入れてぐちゅぐちゅと掻き回してくる。
「ん……♡」
き、気持ちいいけど……雑っつーか下手になってねぇか？
「もう挿れていいんですか？」
「いいけどさ……」
なんか童貞の筆下ろししてる気分だ。
「ローションでヌメッて、ゴムが……」

珍しくゴムに苦戦するみーくんにため息をついてゴムを口で開けてつけてやる。
「このマニアックな格好のまますんの？」
スーツの上を着たまま、ネクタイも外してないのに呆れる。
「師匠、って感じがするので、できればそのままで」
「……分かったよ」
まーいい。タダで抱いて貰ってるんだし、ある程度のワガママはきいてやろう。
「……挿れますね」
感慨深そうにグニッと先端を押し付けてくる。
「いっ」
イテテテ。角度がヘタ！ホント童貞みたいだぞ今日は。
「はいった……」
「あっ♡」
スリスリと接続部を撫でてきたので変な声が出た。
「もうっ、いいから、早く」
──奥まできて欲しい。
「……っ師匠、」
ズン、と突かれて。
チカチカチカ、と目の前に星が飛んだ。
「あ、は……っ♡」
硬いしそそり立ち方が凄い。性感帯全滅だ。
「すご……っ♡めちゃくちゃイイ……っ♡♡♡」
自分で腰を揺らして味わってしまう。
「ほんとですか？」
「もっとズンズンしてぇっ♡♡めちゃくちゃに犯してぇっ♡♡」
ゆるゆるとした動きがじれったい。
足でみーくんの腰を引き寄せると、う、とみーくんの顔が引き攣った。
「……出ちゃったじゃないですか。まったく、情緒もへったくれもない」
ぶつぶつ言いながら次のゴムをつけようとするみーくんから、ゴムをひったくってあわただしくつけてあげる。

ヤりたい。早く……っ♡
「師匠、そんなにイイですか？」
「あぁ……っ♡」
また一気に奥までキて、びりびりと背骨が痺れる。
「うんっ♡いいっ♡みーくんのチンポ、最高っ♡♡」
「……っ、これでもですか」
がっ、とみーくんが。
俺の身体に這っていた文字のようなものを掴んで、握り潰した。
「え」
あ。
「あああああああああああっ！！」
焦点が合う。
モブが。
俺を犯していた。
「や、やめっ……やめろっ……っあん♡」
ゆさ、と腰を揺らされて身体が反応する。
「抜けよっ！俺は、お前とこんなことをするつもりは……っ」
「師匠が悪いんですよ？約束を破ってワンナイトなんてするから」
シーツを蹴ってモブから逃げようとするが、挿れられてるせいで足に力が入らない。
「……っ、してない、今日はまだしてない！！」
「はぁ？」
とにかく何でもいいから、こいつらの『条件』から逃げないと……！
「イってないから、セックスじゃない！！」
「……」
弟子の呆れ顔なんてここまでくると何でもない。
「だから、早く抜……っああ♡♡」
激しっ♡♡ダメっ、ズコバコすんなぁっ♡♡
「やめろっ♡♡やめろってばぁっ♡♡童貞の粗チンなんかにイかされるかよぉっ♡♡」
弟子チンポなんかにっ♡♡負けてたまるかぁっ♡♡
「いや全然そんな顔してませんよ、師匠」

ズン、と奥を突かれて。
「ああああああっ♡♡♡」
俺は盛大にメスイキした。
ぎゅうう、と握った枕が憎らしい。
「イったからセックスですよね？」
「……イってない。精液出てないし……」
「えっ、ならもっと揺さぶってあげますね」
「あああウソっ♡イった、イきましたぁっ♡♡もうズンズンしないでぇっ♡♡」
弟子チンポに完全敗北してしまった……俺は本当にどうしようもない師匠だ……。
「……もう気が済んだろ。早く抜けよ」
「え、嫌ですけど。僕まだ２回目出してないですし」
「……」
「ねぇ師匠。僕たちが何をしたのか訊かないんですか？」
じろりとモブを睨みつける。
「見当はついてる。お前ら、俺を呪っただろう」
「その辺りまではエクボが教えましたもんね。どんな呪いか教えてあげますね。師匠がワンナイトしようとしたら僕たちが分からなくなる呪いです」
条件の開示か。より強固にするつもりだろうか。
「くだらないことを……」
「くだらないですって？」
「そこまでして俺のワンナイトを止めてどうするんだよ。何の実りもない」
「……好きな人が危ない事をするのを止めて、何が悪いんですか。それに、実りならあった」
うっすらと笑うモブにゾクっと悪寒がする。
「師匠、無精子症、治してあげましょうか？」
え
「……治せ、るのか？」
「ええ。僕なら可能です」
ひし、とモブにすがってしまう。

「なお、治して、治してくれっ！！」
「いいですよ、ただし、同時に子宮も作ります。いいですよね？」
子宮……
まあ、別にあってもいいか……
「分かった。構わない」
「じゃあ、師匠の願い、叶えてあげますね」
ポウ、とモブの指先が光って、それが俺の睾丸にかざされる。
「ああ……機能はあるのに、動いて無かったんですね……ここを、こうして……」
ぽろ、と涙が落ちる。嬉しい。嬉しい。
これで俺は、幸せになれる。
「あり、ありがとう、ありがとう、モブ……っ」
「本当にお人好しだなあ、師匠は。犯されてるのにお礼を言ったりして」
処置が終わったらしいモブは俺の腰を掴んで抽送を再開しようとする。
「んぁっん♡それとこれとは、話が別だろっ、早く抜けよっ」
「僕、勃ったままなんですよ。イかせてくれてもいいじゃないですか」
「……仕方ねえな」
イきそこねた辛さは同じ男なら分かる。
話は出した後だ。
「んっ♡んぁっ♡あんっ♡」
ギシギシとベッドが鳴る。
「んんっ♡んぅっ♡ん……？」
手に。
中が空っぽのコンドームが絡んだ。
「え……？」
うっとりと。
モブが嘲笑う。
「モブっ、今コンドームしてるよな！？」
「ふふ、ふ」
モブの腰が速くなる。

ドクンドクンとナカの性器が脈打っていて、限界が近い。
「……っ、やだやだやだっ♡♡っあん♡♡モブ、出さないでっ♡♡」
モブを押し返そうとする手に力が入らない。
「師匠、ワンナイトってのは──」
最奥に腰を打ち付けたモブが俺を腕の上から抱きしめて、お腹の中にじわりと熱いものが広がる。
「こういう危険性があるって分かってたでしょう？」
孕ませよう、っていう意志を体現するように、何度も奥で射精するモブ。
「……っ、」
反射的に締め付けてイく身体が憎い。
「ひどい……」
勝手にゴムを外すなんて、マナー違反もいいところだ。
あー。ピル飲まないと。
「なんで俺にこんなことするんだよ……お前らなんか大嫌いだ」
「あ」